



ピクタインダオン

(おさみがりにぼし)

第25号

発行日 2020年4月20日

発行人 矢代 しず

秋田市御野操7-1-29-305

三月

三月の陽はうすい飴いろ

どことなく春のきざしがして

小高い土手からは

町を見下ろす太平山がみえる

レッドグローブ*に似た香りのする

風の下川原で

野放図にひろがる土手草のなかに

沈んだような白い花の群れをみつけた

遠くの

首をかしげた重機には

煩も累も悶もないのだろう

静謐な光は

花にも重機にも降りそそぐ

平らかに

*葡萄の品種名

草

かつて

川の淵に立った わたし

いま

詩の岸辺にいる

ことばの草々のように

いのちの毛細血管をのびしながら

燃やす

澱に火をつける

炎は

青白く 燃えている

ひとは たくさんの

澱を 燃やし

あらたな鉦脈を掘りつづける

水 1

ことばを贈ります

すつきりと熟成した

日本酒のような

味わいのあることば

すうつと 体に染みこむ

ことばを贈ります

一〇九歳の

亡き父へ

感謝を贈ります

冬の餌食にされそうになったとき

いつも

あなたは太陽になって

氷色のところをとかしてくれた

ありがとう!

感謝を贈ります

一〇二歳の

亡き母へ

春を贈ります

伏流水のような兄

徒口むだぐちはたたかず

スイセンの黄色い喇叭のような

開かれた口から

時折きこえた

夜寒のような孤独

春を贈ります

九歳違いの

亡き兄へ

亡き

ひとたちよ

わたしたち姉妹には

脈々と

緑の森の一本の川がながれています

水
2

碧の家は

ふかい海の底にあつた

豊潤な

静寂のなかを

大きな口の深海魚が

ゆつたりと

泳いでいる

碧い家は

岩を背に

まどろんでいる

潇洒な家

細長い戸の隙間からは

乳白色の光が

やわらかさをひいて

ながれている

だれもない

エントランスには

巻き貝の

螺旋の階段があり

上っていくと

書斎には

古びて塗りがはげた額縁の

水絵が掛かつていた

絵には

哀しみのひとを癒やし

立ちあがる

龍のような

強い意志があつた

かつて

こころの空虚を埋めてくれた

水との交感を描き遺したという

絵には

朝の

頬をそめた川の

しずかな輝き

水面にとけ込む

光の陰影

心をうるおす

水の温もり――

時折

わたしも

いのちの深層をながれる

水の

碧の家に

行きたくなることがある

* 渡辺芳勝氏の絵画「碧の街」に触発されて



①

太ったことば
痩せたことば

痩せたいことば
太りたいことば

ことばに聞いてみよう！

②

バレンタインでもらった
チョコでつくった

城

いつのまにか破られて
空き箱深し

③

【ある夫婦の会話】

妻 あなたのしゃべるのには
いつも主語がないわ

夫 我が家の主語は
おまえに決まっておる

妻 うへっ!!

④

ダイエットは歩いてこない
だから

歩いて行くんだね

⑤
宛先のない
未知なることばで書いた
手紙は
だれの目にもふれない

⑥
何回もタッチしてるのに
動かない
スマホが人見知りしている
乾いた指に
水 水を!!

⑦
エイヤッ!
死んだ時間を蹴飛ばし
そして
身軽に
生きた時間を歩む

⑧
かるい
という字が
書けなくなつた
重くなつた
わたし

⑨

ラジオから

歌が聞こえてくる

ラジオをとめると

歌は消える

生きていると

人生がある

生きるのをやめると

人生はなくなる

⑩

詩人のふりはしてるが

私は詩人ではない

と 谷川俊太郎は言っている

私は

詩人のふりをしてみたい

⑪

普及価格のケーキを食べると

中位の詩ができる

高いチョコレートケーキを食べると

どんな詩が書けるかな？

だれかご馳走してください！

【あとがき】

ユーチューブで、若松英輔氏の講演「志樹逸馬の詩と出会う」(二〇一九)を見た。若松氏は、十九歳で初めて志樹逸馬の詩と出会ったという。

志樹は一九一七年山形県生まれ。十三歳でハンセン病を発病。十七歳頃から創作。療養所の長島愛生園(岡山県)で四十三歳で没。キリスト者で、特定の宗教や病に囚われず、広い世界を自由に見ている。死後に、仲間が二冊の詩集を刊行。

若松氏は、志樹の眼の奥にある「紅く燃えている」悲しみの炎を見つめ、己れに訪れた悲しみを生きた志樹の詩を紹介しながら話を進めている。

以下、心に残った言葉――。

☆詩には、正しい書き方はない。詩は未知なる自分宛の手紙。

☆書くことは、言葉を血肉化すること。書くことは、耕すこと。

☆志樹は特別なことを書いていない。私たちに与えられている幸せを気づかせてくれる。詩は食べてみないと分からない。

☆今日読んだ詩でも、明日はまた違う感想をもつ。詩は読まれて完成していく。

☆一日で読むのではなく、何日もかけて読んで、もっと深く知る。詩を読み込むと、視点が変わる。

☆詩集は、文字よりも余白が多い。その余白を読み込む。自分の中にある言葉で、詩を編む。

☆詩人は、扉となる言葉を持っている。迷ったら、その扉を開ける。

☆書いていることをただ感じるのではなく、書き得なかったことを知る。分からないことをはっきりさせる。

☆意味は表層でしかないから、辞書は役に立たない。

☆いのちで書かれたものは、いのちで捉える。誰が書いたのかではなく、何を書いたかを知る。

☆「いのち」であることによって、人と自然は、わかちがたく結ばれている。その結合の記憶を思い出していく。志樹にとり、自然は観察の対象ではなく、対話すべき相手。

☆『新編 志樹逸馬詩集』より

曲った手で

曲った手で 水をすくう
こぼれても こぼれても
みたされる水の
はげしさに
いつも なみなみと
生命の水は手の中にある
指は曲ついても
天をさすには少しの不自由も感じない

土壌

わたしは耕す

世界の足音が響くこの土を

全身を一枚の落ち葉のようにふるわせ 沈め

あすの土壌に芽はえるであろう生命のことばに渴く

だれもが求め まく種子から

緑のかおりと 収穫が

原因と結果とをひとつの線にむすぶもの

まさぐって流す汗が ただいとい

原爆の死を 骸骨の冷たさを

血のしずくを 幾億の人間の

人権や 国境を ここに砕いて

かなしみを腐敗させてゆく

わたしは

おろおろと しびれた手で 足もとの土を耕す
どろにまみれる いつか暗さの中にも延してくる根に
すべての母体である この土壌に
ただ 耳をかたむける

花

庭さきの花は

天と地をつなぐ

自然の微笑

闇

闇やみの中にも目をひらいていたいと思う
人はたいてい

目をつむる
眠る

だが

このしずけさの中にこそある

闇の声に

わたしは耳をすましたい

【お知らせ】

第七回「ピッタの会」の延期について

四月十二日に開催を予定していた「ピッタの会」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、あきた文学資料館が臨時休館となったので、延期となりました。

新たに開催日が決まり次第、お知らせします。

